第１回琴浦町立ふなのえこども園あり方検討会について

子育て応援課

第１回琴浦町立ふなのえこども園あり方検討会を開催し、園舎老朽化に伴う新園舎建設に向けての協議を行った。

１　開催日　令和２年 10 月９日(金)

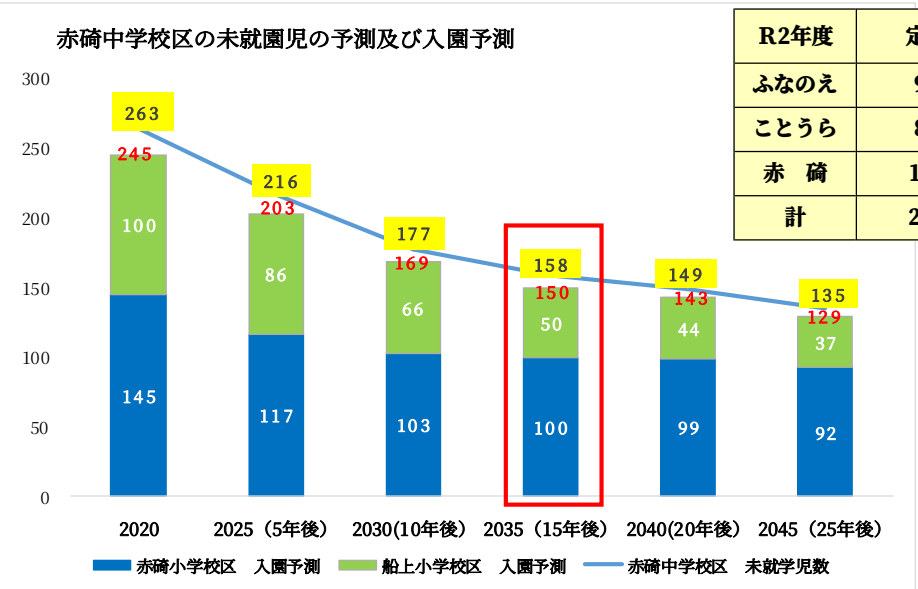
２　委員

畑千鶴乃(鳥取大学准教授)、徳田憲生(赤碕こども園長)、高力和美(教育委員)
御﨑智徳(ふなのえこども園保護者)、石賀貴幸(ことうらこども園保護者)
倉長幸代、浪花恵子(主任児童委員)、田中清治(教育長)、山口秀樹(副町長)

３　内容

（１）　赤碕中学校区の各園の現状と課題、子どもの人数の推移について

・人口推計によると、未就学児及び入園児数が今後大きく減少していく。
・公立・私立とも保育士・保育教諭の確保に苦慮している。
・赤碕中学校区内３園とも園舎の老朽化が進んでいる。



R2年度	定員	入園児（予定）
ふなのえ	90	87
ことうら	80	50
赤　碕	110	106
計	280	243

（２）　子どもにとって望ましい保育環境について

集団の中での様々な体験や、多くの友達と関わる機会を保障し、保育士等を確実に配置していくためには、ふなのえこども園とことうらこども園を統合し、２園の園児が入園できる新園舎を建設することが望ましいと考える。

４　委員からの意見

・園を統合した場合、地域とのつながりをどうしていくのかが課題。
・園児にとって安心安全な場所で保育されることが大前提であり、どのような集団や環境の中で保育するのが良いかを考えていく必要がある。
・統合した場合、園が遠くなる保護者もあると思うので、便利の良い場所に建設する必要がある。
・統合については、保護者や地域と十分に話し合い、説明を行うことが必要。

５　第２回検討会の開催(11 月中旬開催予定)

第１回での委員からの意見を受け、引き続き子どもにとって望ましい保育環境の充実について検討を行い、新園舎建設に向けて協議を行っていく。

第１回　琴浦町立ふなのえこども園あり方検討会資料　（R2.10.9）

１　ふなのえこども園あり方検討会の設置について

（1）設置の趣旨

ふなのえこども園の園舎老朽化に伴い、園舎の建て替えや園の適正規模等を含めた今後のあり方について検討を行う。

（2）検討内容

①ふなのえこども園の園舎建て替え

②人口ビジョンに基づく赤碕中学校区の園の適正な規模　等

（3）現在の課題

①ふなのえこども園の老朽化（昭和53年：経過年数42年）

②赤碕中学校区における出生数及び園児の人数が今後減少する見込みであること

（人口推計では15年後には、赤碕中学校区の園児の人数は、今の園児数より約4割減少する見込み。）

２　各園の現状と課題

（1）現在の赤碕中学校区のこども園

施設名	建築年	経過年数	構造
ふなのえこども園	昭和53年	42年	PC 造
ことうらこども園	平成　3年	29年	PC 造
赤碕こども園	平成　7年 平成16年（乳幼児棟）	25年 16年	PC 造外 木造

（2）今年度の利用状況

（人）

施設名	定員	4月入園数	途中入園	年度末予定
ふなのえこども園	90	80	7	87
ことうらこども園	80	45	5	50
赤碕こども園	110	101	5	106
合　計	280	226	17	243

※広域受入子ども除く

(3)各園の年齢別の人数 (R2.4.1 現在)

(人)

施設名	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
ふなのえこども園	1	17	11	17	13	21	80
ことうらこども園	3	4	10	5	12	11	45
赤碕こども園	1	13	21	17	23	26	101
合　計	5	34	42	39	48	58	226

※広域受入子ども除く

【赤碕中学校区のこども園の位置】

(4)各園の抱える課題

①ふなのえこども園(公立)について

建設から42年が経過し、施設の老朽化がかなり進んでいる。修繕箇所も増えており、最近でも、水漏れ等が発生し(給水管の耐用年数40年)急遽修繕を行った。施設の耐用年数(鉄筋コンクリート造は47年)まで残り約5年である。

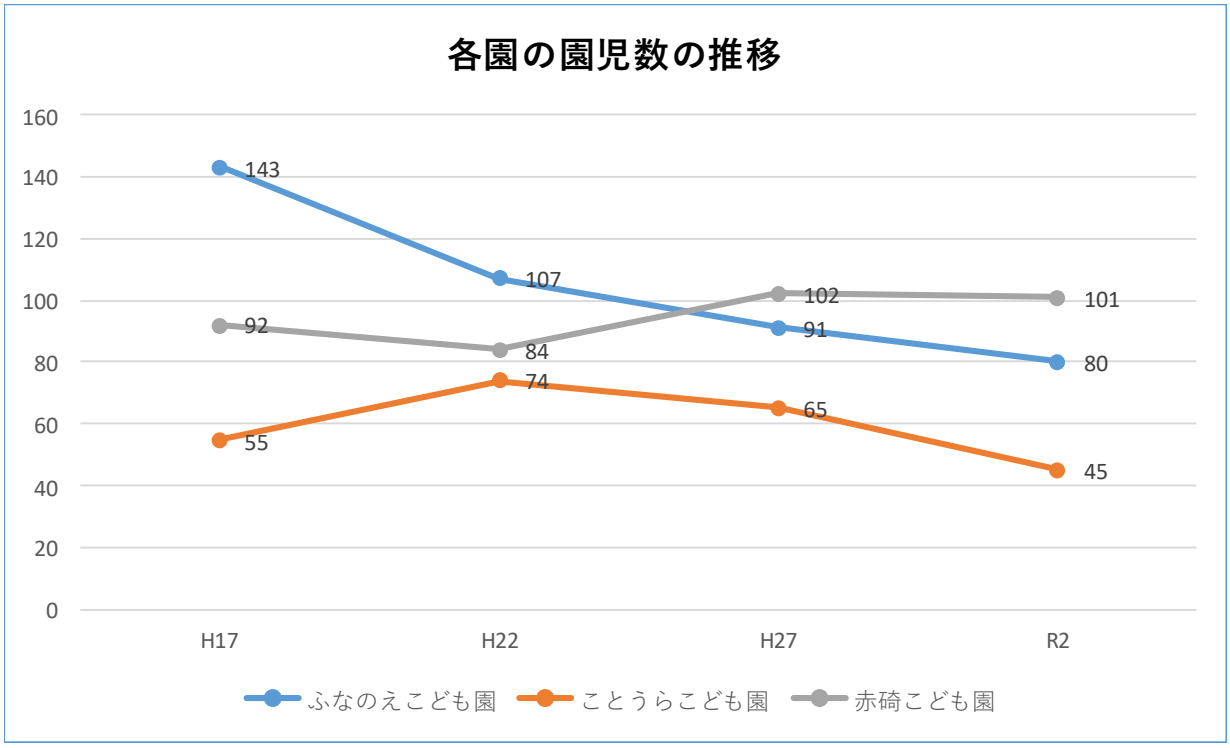
②ことうらこども園(公立)について

建設から29年が経過している。海の近くということもあり、塩害等で遊具が劣化し、使用できないものも増えている。また、建設当時より、未満児の受け入れが増えたため、0歳児は職員室の一部を改装、1歳児はテラス部分を増築して部屋を確保しており、各部屋やトイレ等に行きにくい構造になっている。定員80人に対し、今年度の入園予定は50人と定員割れの状況。

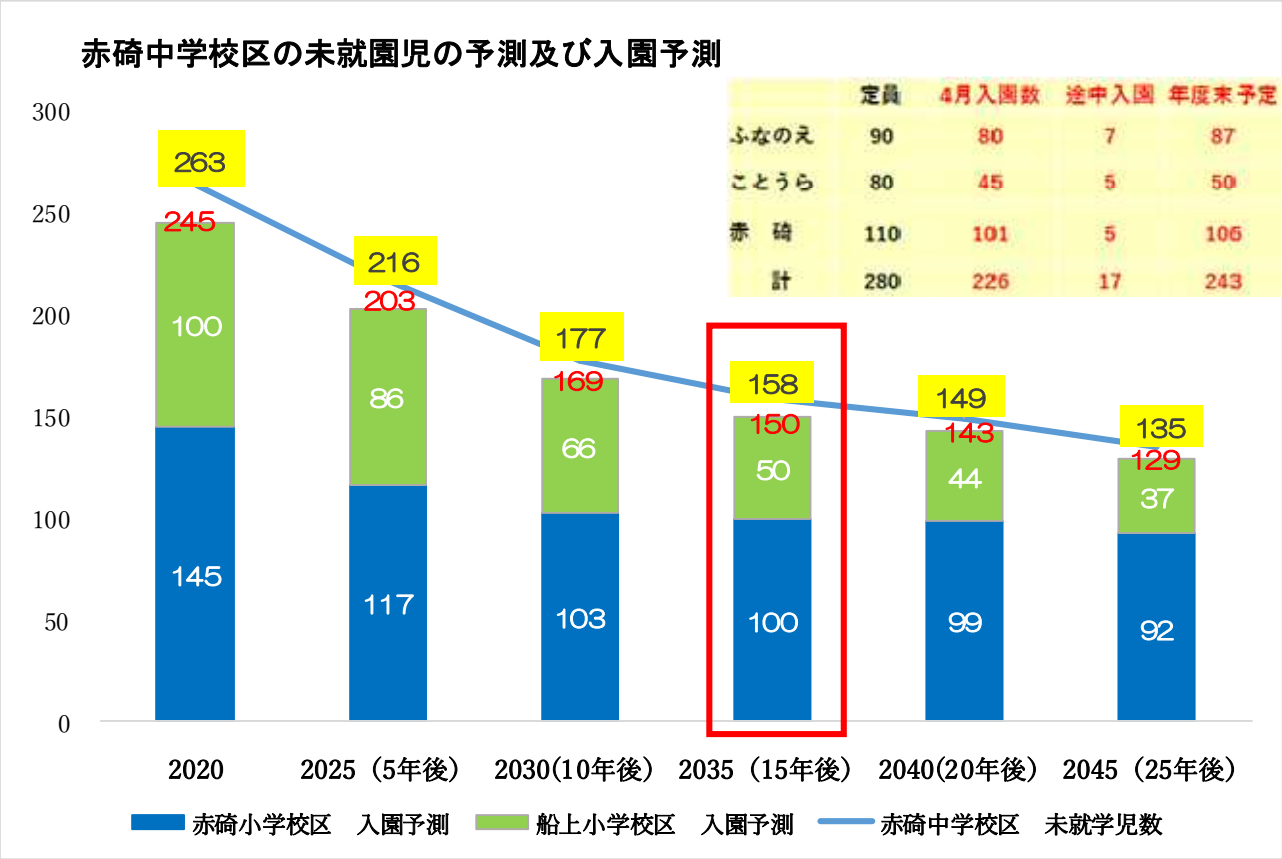
③赤碕こども園(私立)について

平成7年度に建設した園舎については、25年が経過し、施設の修繕が増えてきている。遊具についても同様に修繕が必要なものが出てきている。その他、保育士の不足や業務負担(時間外勤務の増加)が課題となっている。

(人)



※4月1日の人数　広域受入子どもは除



	定員	4月入園数	途中入園	年度末予定
ふなのえ	90	80	7	87
ことうら	80	45	5	50
赤　碕	110	101	5	106
計	280	226	17	243

一社）持続可能な地域社会総合研究所による「地域人口ビジョン」の予測では、今後赤碕中学校区の子どもの人数は減少し、15年後の2035年には、未就学児は、今の263人から158人、入園児は、245人から150人と大きく減少していく見込みになっている。

特に船上小学校区の子どもの数の減少幅が大きく、今の100人から50人と半数に減少する見込みである。

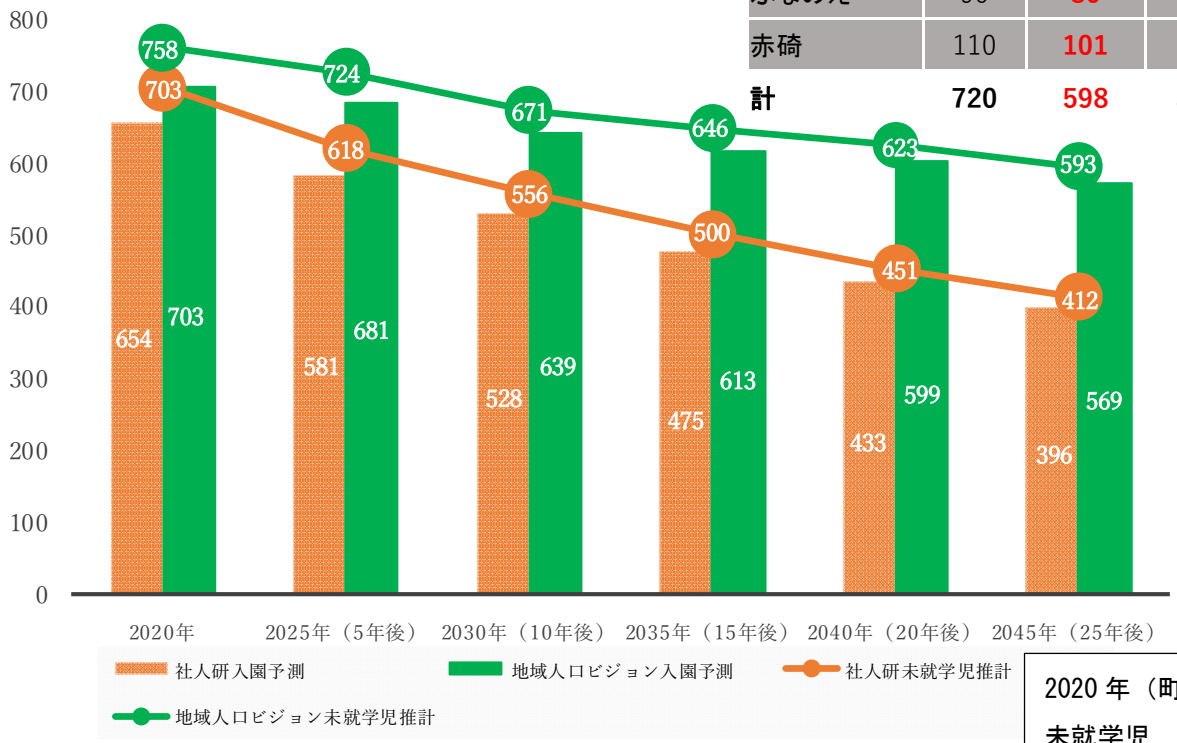
また、今年度の船上小学校区の100人については、ふなのえこども園が87人の入園の見込みであるため、その他の子どもについては、赤碕小学校区の園を中心に入園している状況である。

【参考】琴浦町及び東伯中学校区における
未就学児の予測及び入園予測
（社人研と地域人口ビジョンの推計の比較）

（R2 年度）

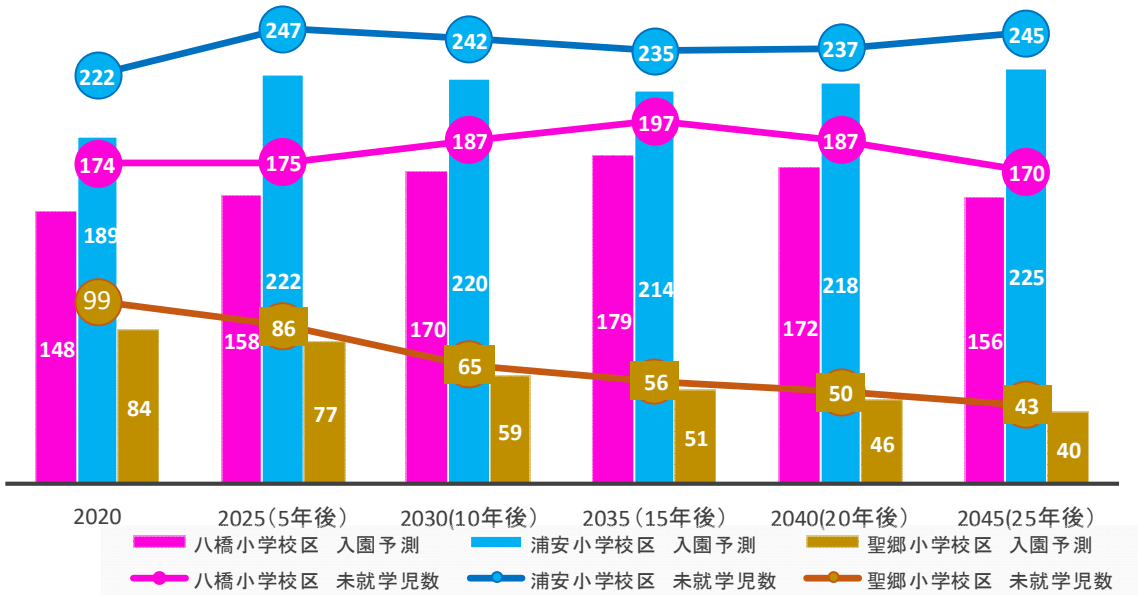
園名	定員	入園数	途中	合計
やばせ	120	98	6	104
しらとり	140	120	17	137
こがね	90	74	7	81
みどり	90	80	10	90
ことうら	80	45	5	50
ふなのえ	90	80	7	87
赤碕	110	101	5	106
計	720	598	57	655

琴浦町（全体）未就学児推移及び入園予測



2020 年（町全体）
未就学児　745 人（実数）
入 園 児　655 人（予定）

東伯中学校区の未就学児推移及び入園予測



４　子どもにとって望ましい保育環境について

〇一定の集団規模があること

幼児期において、子どもが人と関わる力をはぐくむにあたり、集団による遊びの楽しさを味わうことや、同年代の友達との関わりの中で、折り合いをつけるといった体験を通じて、主体性や社会的態度を身に付けていくことを考えると、一定の集団規模が必要と考える。

〇幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説より（平成30年3月）

【序章】第2節乳幼児期の特性と幼保連携型認定こども園における教育及び保育の役割
～2. 幼保連携型認定こども園の生活～

幼保連携型認定こども園において、園児は多数の同世代の園児と関わり、気持ちを伝え合い、ときには協力して活動に取り組むなどの多様な体験をする。

そのような体験をする過程で、園児は他の園児と支え合って生活する楽しさを味わいながら、主体性や社会的態度を身に付けていくのである。

特に近年、家庭や地域において、園児が兄弟姉妹や近隣の乳幼児と関わる機会が減少していることを踏まえると、幼保連携型認定こども園において、同年齢や異年齢の園児同士が相互に関わり合い、生活することの意義は大きい。

【第2章】人との関わりに関する領域「人間関係」に係るねらい

（1）幼保連携型認定こども園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

（2）身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。

（3）社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

〇必要な保育教諭が確保されていること

琴浦町では、現在町独自の基準で国の配置基準よりも手厚い配置を行っている。近年保育士・保育教諭の不足が問題になっているが、町でも必要な保育士等の確保が難しい状況である。今年度から一部の園でICT を導入し、保育以外の事務の軽減に対する取り組みを行っている。子ども一人一人に丁寧に関わる保育を行うためにも、保育士等の確保が必要である。

5 今後に向けて

今後、赤碕中学校区の入園児数が減少し、ふなのえこども園（定員90人）、ことうらこども園（定員80人）、赤碕こども園（私立、定員110人）の定員割れが予測される。

集団の中での様々な体験や、多くの友達と関わる機会の保障と、保育士・保育教諭の確保ということから、新園舎については、ふなのえこども園、ことうらこども園を統合し、2つの園の園児をまかなえる規模の園舎を建設することが望ましいと考える。